ふるさと学習など　　令和6年度

ＰＴＡ・地域住民・地域企業・学校が連携協働してふるさと学習の推進
～自分の言葉でふるさとに自慢を語る～

養治小学校ＰＴＡ

ＰＴＡ・地域住民・地域企業・学校が連携協働してふるさと学習の推進

ＰＴＡ名称	養治小学校ＰＴＡ	学校写真
所在地	下関市本町２丁目６－1	
学校地域の概要・組織	養治小学校は、明治６年に開校した歴史ある学校である。また、校区には、源氏と平家の戦いの場となった壇ノ浦や、日清戦争の講和条約締結の場となった歴史的建造物もあり、幾度となく歴史の表舞台となったことも、養治小学校の自慢となっている。これらの魅力を大人達が児童に伝えたいという強い願いがあり、養治小学校で「わくわくふるさと海峡学」が始まった。そこでは「本物を体感する」ことをめざして、様々な体験学習が計画されている。 今年度より、ＰＴＡの保護者が積極的にこれらの活動に参画して支援することになり、児童と共に歴史や文化を体験することによって地域の魅力に接したり、我が子との思い出作りも同時に行ったりしていくことになった。また、体験活動は校外での活動が主なので、道中の交通安全、活動の安全管理、救護なども保護者間が連携しながら実施していきたい。	
研究テーマ	わくわくふるさと海峡学 ～海洋、歴史・文化、自然・郷土を探究する体験活動～	
成果と課題	今年度より「わくわくふるさと海峡学」として再構築し、体験学習を通して「自分の言葉でふるさとの自慢を語る」ことをモットーに実働してきた。活動内容も充実して、地域住民や関係団体とさらに連携・協働しながら、継続できる活動になることができた。今年度より、保護者に体験活動への参加を呼びかけて、児童と共に歴史や文化を体験することによって地域の魅力に接したり、我が子との思い出作りも同時に行ったりしていくことができて好評であった。 活動が増えて負担になっていると懸念されているが、これらの体験活動の、準備や運営は各関係者の主導で、教職員や保護者はサポートや児童管理である。そのため、学校に負担はないが、年間計画の作成や依頼、調整、振り返りなどは子どもが主に関わる学校や保護者が実施する必要がある。 コロナで停滞していた地域連携も盛り上がってきているので、子どもは学校や家庭だけで育てるのではなく、地域が一体となって「地域の子どもは地域で育てる」ことをみんなで共有しながら、今後も「わくわくふるさと海峡学」を実働させていきたい。海洋教育、歴史・文化、自然・郷土教育が満載の魅力ある養治地区ならではの体験活動を、今後も積極的に実働させていきたい。	

わくわくふるさと海峡学
～海洋、歴史・文化、自然・郷土を探究する体験活動～

1. 活動のポイント　～自分の言葉でふるさとに自慢を語る～

養治小学校は、明治六年に開校した歴史ある学校（創立１５２年）である。本校がある「唐戸」は、下関市の中心地として下関市役所やオフィスビルが建ち並び多くの人々が行き交うにぎやかな場所である。「唐戸」は中国が唐と呼ばれていた頃に、ここが唐との貿易の門戸として重要な港町として位置づけられて「唐戸」と名付けられたと言われている。また、戦国時代の始まりとなった「源平合戦の最終地　壇ノ浦」や「武蔵と小次郎の決戦地　巌流島」、「明治維新の志士の交流の場」、「日清戦争　下関講和条約締結の地」、「詩人　金子みすゞ誕生の地」など、日本の歴史上の重要なポイントである海峡・歴史・文化の事柄が身近に感じられる、まさに「本物」が多く存在する地域である。

けれども、地域住民である児童の多くは、これらがいつも身近にあることから、多くの観光客が集まるところにわざわざ訪ねる機会もないと、児童の会話の中から感じられる現状があり、児童と地域の魅力がつながる「きっかけ」があまり見られない。

本校の「強み」は、下関市役所関係課（市役所が近い）中東地区（唐戸）まちづくり協議会や連合自治会、神社仏閣（赤間神宮、亀山八幡宮、貴船神社など）、海響館（水族館）、水産大学校、下関市立大学などの各種団体が、学校教育に対してとても協力的であることである。さらに、地域の素敵な魅力を大人達が児童に伝えたいという強い願いを持たれていることから、本校で「ふるさと学習」を推進している。ここでは「本物を体感する」ことをめざして、様々な体験学習が計画されて実働している。

本校では、これまでも各種団体等と連携・協働しながら「ふるさと学習」を実践してきたが、小学６年間を通しての系統性がなかったり、その時だけで単発で終わっていたものがあったり、振り返りや記録写真等が十分になかったりという現状があった。そのために、新しいことを始めるのではなく、今まで実践したことを整理して教科や領域との関連性を振り返りながら、地域とのかかわりも再確認して、今年度から新たに「わくわくふるさと海峡学」として実働することになった。

2 めざす姿の共有

〇ふるさと養治の魅力を発見して、**自分の言葉でふるさとの自慢ができる。**

めざす姿　子ども　ふるさとの魅力を探求して自分なりの表現の方法でふるさとの魅力ることができる。

大　人　子どもとともに学ぶことで、ふるさと養治の魅力を再認識し、地域の歴史や文化の伝承、各地域の祭事などの活性化をめざす。

3 活動の内容

「わくわくふるさと海峡学」は３つのカテゴリーで開催されている。

① 海洋教育・・・三軒屋海岸で磯遊び・壇ノ浦漁港訪問・海洋ゴミの調査・唐戸市場散策・巌流島で釣り体験・サメの生態に学ぶ・船のデザイン出前授業・海響館との連携教育

② 歴史・文化教育・・・赤間神宮・先帝祭上臈道中体験・巌流島の決戦・史跡見学（英国領事館・秋田商会・極楽寺・日清講和記念館など）・藤原義江記念館・歴史紙芝居鑑賞＆実演

③　自然・郷土教育・・・火の山公園・トルコチューリップ園・火の山ロープウェイ・関門橋・関門トンネル人道・昔遊び体験・古典楽器体験・八丁浜総踊り

☆　保護者の活動の流れは、　　※モットーは「できる時にできることを、そして楽しく！」

学校からのお知らせ　→　活動への参加申込み　→　事前打ち合わせ（書面）

→当日の役割分担（引率・見守り・救護・交通安全指導など）　→　振り返り（書面）

4　実施計画

実施計画案の中に「地域・保護者」（右部）の関わりも明記して周知を行った。

5　実働までのプロセス

「わくわくふるさと海峡学」の実働については、学校全体で共通理解・共通実践を行うことにした。いろいろな活動が増えることによって、これ以上に業務の負担がないように進めていくことにした。

活動のコンセプト　　実働課程の明確化

・体験活動を中心に地域の魅力を体感させる。

　→地域の魅力発見・郷土愛の育成

・現地での活動そして外部講師の講話や指導で活動を進めていく。

→本物を知る、本物から学ぶ

・振り返りを行い、キャリアシートと関連させて記録を蓄積させていく。

→本物を語る

「自分の言葉でふるさとの自慢を語る」

マネジメント・振り返り（改善）　※必要に応じて保護者が参加

① 校長（教頭）が体験活動先の所属長に連絡して、活動のねらいと内容を伝えて承諾を得る。

② 相手方の担当者と本校担当教員が体験活動内容の打合せを行う。

日時・場所・時間・内容・参加児童の様子

準備物・事前学習　　など

③ 前日最終確認

最終人数や時間の確認

④ 体験活動当日

活動の記録写真

SNS（学校 HP 等）で活動の報告

⑤ 児童の振り返り

「ワークシート」に記入

「礼状」については、サンプル枠を作り、それに児童が感想を記入して先方に送る。

⑥ 相手方の担当者と本校担当教員が振り返りを行い、成果や改善点について協議する。次回や次年度の活動について、継続や終了等について決定する。

⑦ 校長（教頭）が体験活動先の所属長に連絡して、お礼を伝え、次の活動についての確認をする。

6　特色ある実働の様子

先帝祭　上臈道中を体験しよう！５月９日（木）

「先帝祭上臈道中」をもっと身近に感じたいということで、下関舞踊協会の花柳佳寿宗先生に相談したところ、花魁（上臈）の衣装を着て、下駄（三つ葉ぼっくり）を履いて、「外八文字」の歩き方を学校で体験できることになった。また、テレビ局３局、新聞社１社の取材があり、たくさんの児童がインタビューに答える経験もすることができた。

５・６年生全員が本物の重い打掛を着て、さばきながら歩き、外八文字で歩く体験も行い、後半は八丁浜総踊りも体験することができた。また、テレビ局３局、新聞社１社の取材があり、たくさんの児童がインタビューに答える経験もすることができた。

【児童の感想】

・４kgの打掛や下駄を履いて外八文字の経験ができてうれしかったです。

・テレビで見たことがあったけど、実際に着物や下駄を履くと重さやたいへんさがよくわかりました。

・普段できない体験を日本舞踊の先生に教えてもらってできたことが思い出になりました。

・どれも生まれて初めての経験で、やってみないとわからないことでした。先帝祭に行ってみたいです。

先帝祭の見学

4 kgの打掛け

本物の「三つ葉ぼっくり」

海響館との連携学習

今年度より各学年のテーマを設定して、海響館との連携体験学習を実施することになった。

1 年	イルカの生態
2 年	ペンギンの生態
3 年	フグの生態
4 年	関門海峡の魚介類
5 年	クジラの生態
6 年	金子みすゞが見た海の世界

１年生のテーマは「イルカの生態」、２年生は「ペンギンの生態」で、事前に海響館の職員の出前講座を学校で受け、2 回目は現地で本物からじっくり学びんだ。事前学習しているので、視点をしっかりもって取り組むことができ、3～6 年生も各テーマで学びを積み上げていく。

１年生は「イルカ」の学習。トレーナーの髙木さんから、イルカを見ながらイルカの話を聞いた。事前に質問を届けていたので、質問に答えていただきながらイルカの様子を学ぶことができた。

イルカのトレーニング（1 年生）

獣医さんのお話（2 年生）

フグの習性（3 年生）

関門海峡の魚（4 年生）

下関とクジラ（5 年生）

みすゞと海（6 年生）

7　保護者・関係団体との連携

① 地域の祭りの活性化

コロナ禍で4年間中止になっていた地域の神社の「子ども神輿」が復活した。4年間のブランクは、神社との連携や神輿の手配、人員確保などを難しくしたようであったが、復活させたいという地域住民や保護者の願いが通じて実施することができた。休日の開催であるが、学校や PTA でしっかりと呼びかけをして、地域の伝統・文化を継続できるように支援していきたい。

② 保護者の参画

「わくわくふるさと海峡学」の実施にあたり、学校メールや学校ホームページ「養治小日記」で事前に保護者の参加や支援を依頼した。当日は8名の保護者の参加があり、釣り方や安全管理を支援していただいた。また、日本釣振興会山口支部から7名の方が県内各地から来られて、支援していただいた。

8　「次の一手」

今年度より「わくわくふるさと海峡学」として再構築し、体験学習を通して「自分の言葉でふるさとの自慢を語る」ことをモットーに実働してきた。さらに充実させるために地域住民や関係団体とさらに連携・協働しながら、継続できる活動になるように努めてきた。今年度より、保護者にも体験活動への参加を呼びかけて、児童と共に歴史や文化を体験することによって地域の魅力に接したり、我が子との思い出作りも同時に行ったりしていくことができて好評であった。

コロナで停滞していた地域連携も、様々な体験活動を通してより親密につながることができ、「子どもから元気をもらい街が明るく元気になった。これからも、できることをたくさん支援していきたい。」という言葉をたくさんいただいた。子ども達にもそのようなことが伝わり、「わくわくふるさと海峡学」の実施をとても楽しみにしていて、たくさんの大人とのふれあいを喜んでいる姿がたくさん見られるようになった。

子どもは学校や家庭だけで育てるのではなく、地域が一体となって「地域の子どもは地域で育てる」ことをみんなで共有しながら、今後も「わくわくふるさと海峡学」を実働させていきたい。海洋教育、歴史・文化、自然・郷土教育が満載の魅力ある養治地区、「次の一手」はたくさんあるので、今後も積極的に取り組んでいきたい。

～自分の言葉でふるさとに自慢を語る～